

ふたたび通説的価値尺度論の問題点について

—三宅義夫教授への反論—

松 田 清

目 次

はしがき

- [I] 「測定するのではない」か？
- [II] 「価値表現」はいつでも可能か？
- [III] 「等価交換」を前提しているのは誰か？
- [IV] 価値と交換価値

—「むすび」にかえて—

は し が き

周知のように、マル経貨幣論においては「貨幣は必ず金でなければならない」とされているのであるが、その所以について、かつて飯田繁教授は次のように述べられたのであった。すなわち、「労働生産物が商品形態をとるかぎり、したがってまた、商品の貨幣形態——貨幣が存続するかぎり、貨幣はあくまでも金でなければならない、いいかえれば、金は貨幣の王座をけっしてさらない（いわゆる“金の廃貨”はけっしておこらない）、というのがマルクス貨幣理論の帰結なのだ」¹⁾と。しかし、もしも本当に飯田教授の言われるように「労働生産物が商品形態をとるかぎり、金は貨幣の王座をけっしてさらない、というのがマルクス貨幣理論の帰結なのだ」とすれば、今日では、労働生産物が商品形態をとっているにもかかわらず、金は「貨幣の王座」には現に就いていないのであるから、マルクスの貨幣理論はその限りではまちがっていたのだということにならざるをえないであろう。いったい飯田教授は、マルクス貨幣理論の

1) 飯田 繁『マルクス紙幣理論の体系』日本評論社、1970年、14ページ。傍点—飯田教授。

いかなる理解に立たれて、上のように言われたのであろうか？

飯田教授の理解されているところを要約して示せば、次のようなことになるであろう。すなわち、“マルクスの貨幣理論によれば貨幣を貨幣たらしめる機能は価値尺度機能である→価値尺度機能を果たしうるものはそれ自体十分価値を持つ特定の一商品だけである→貨幣は必ず特定の一商品でなければならない→貨幣が必ず特定の一商品でなければならない以上歴史的必然として貨幣は必ず金でなければならない”，と²⁾。こうして飯田教授は、「労働生産物が商品形態をとるかぎり、金は貨幣の王座をけっしてさらない、というのがマルクス貨幣理論の帰結なのだ」と解される根拠をば、マルクスの「価値尺度」論に求めておられるわけであるが、そしてそれは、何も飯田教授に特有のことではなく、マルクス経済学者に共通することなのである³⁾が、しかし、貨幣の価値尺度機能とはなん

2) 「貨幣は必ず金でなければならない」のはマルクス経済学者の常識であるから、なぜそうであるのかをわざわざ説明してくれているマルクス経済学者はそうざらにはいない。その点では私は飯田教授に感謝するものであるが、ただ残念なことに教授の所説自体には賛同できない。拙稿『貨幣は必ず金でなければならない』か？—マルクス『価値尺度』論の一解釈によせて—(阪南大学『阪南論集 社会科学編』第21巻第4号所収。以下、「拙稿[3]」)と略称する)参照。

3) マルクス経済学者が「貨幣は必ず金でなければならない」と主張する際の依り拠が貨幣の価値尺度機能にあるということは、例えば、岩野茂道教授の「金廃貨」論を批判されるに際して、岡橋保

であるのかという肝心要の点について、奇妙にもマルクス経済学者の見解は分かれているのである。

周知の宇野・久留間論争はこの際措くとしても、例えば、飯田教授は「単位貨幣量の価値(分母)で諸商品の価値(分子)を量的に測定・尺度することによって、諸商品の価値量は一定貨幣・金量(商)で表現され、形態化(価値形態に転化)する。」⁴⁾と言われるのに対して、三宅義夫教授は、「往々誤って解されているように、金の価値をもって諸商品の価値を測定するのではない。」⁵⁾と言われ、「商品がその価値を貨幣商品金で表現するばあい、金は価値の一般的尺度として、つまり価値尺度として機能しているのであり、商品の価値を金で表わしたものが、その商品の価格である。」⁶⁾とされる。「測定する」と「測定するのではない」とでは180度の隔たりがあるのである。はてさて、どちらが正しいのであろうか?

たしかに、マルクスも言うように「ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえてやがらない」⁷⁾なのであってみれば、飯田教授の言われるような「単位貨幣量の価値(分母)で諸商品の価値(分

子)を量的に測定・尺度する」などということが現実にかににして可能なのか、想像もつかないのであって、その限りでは三宅教授に倣って「金の価値をもって諸商品の価値を測定するのではない」と言うほかないであろう。けれども、それを言うなら、そもそも「商品がその価値を貨幣商品金で表現する」ということ自体が不可能なのだ、ということにもならざるをえない。なぜなら、「ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえてやがらない」のだとすれば、商品は自分自身をいくらためつすがめつしてみても自分の価値の大きさを知ることはできないはずなのであって、自分でもどれだけの大きさであるかを知らない(知ることができない)自分の価値の大きさ(たとい貨幣商品金で以てであるにせよ)これこれだと表現することは不可能であるにちがいないからである⁸⁾。

そればかりではない。「金の価値をもって諸商品の価値を測定する」と言っているのは誰よりも先ずマルクスその人なのである。すなわち、「すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の一商品で共同に計ることができる」(K. I, S. 109)と。あるいはまた、「すべての商品がその交換価値を金で、一定量の金と一定量の商品とが等しい大きさの労働時間をふくんでいる

教授が「金の価値尺度機能は無用か?」と問いかげられたことにも象徴的に示されている。岡橋保「金の価値尺度機能は無用か?—金廃貨論者の世界インフレーション論批判—」(大阪学院大学『商経論叢』第2巻第2号所収)参照。

- 4) 飯田 繁『マルクス貨幣理論の研究』新評論, 1982年, 28ページ。
- 5) 三宅義夫「貨幣の諸機能」(遊部久蔵他編『資本論講座 1』青木書店, 1963年, 所収), 237ページ。以下、「三宅[2]」と略称する。
- 6) 同前, 235ページ。
- 7) Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, 1. Band in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 25, S. 62. カール・マルクス『資本論』第1巻, 『マルクス=エンゲルス全集』第23巻所収(岡崎次郎訳), 64ページ。以下, 本書から引用する場合には, K. I (第3巻は K. III) と略記し, *Werke* 版原書のページ数とともに各引用文の末尾に付記する(訳文はすべて邦訳『全集』版の岡崎次郎氏の訳による)。

- 8) もっとも、このように言う、すぐさま次のような反論がでてくるかもしれない。すなわち、「なるほどマルクスは「ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえてやがらない」と述べているけれども、それはあくまでも「一つの商品」についてなのであって、その証拠に彼は、すぐ続けて、「とはいえ、諸商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的な単位の諸表現であるかぎりでのみ価値対象性をもっているのだということ、したがって商品の価値対象性は純粋に社会的であるということ」を思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにはしか現われえないのだということもまたおのずから明らかである。」(ebenda) と述べているのではないか、と。しかし、この点については後で検討することにした。

割合におうじて測るから、金は価値の尺度となる。」⁹⁾と。マルクス自身がこれほど明瞭に「金の価値をもって諸商品の価値を測定する」と述べているというのに、何故に三宅教授は敢えて「往々誤って解されているように、金の価値をもって諸商品の価値を測定するのではない。」などと言われるのか？ 逆にまた、「ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえない」ということを百も承知の上で、何故にマルクスは「すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で共同に計ることができる」などと言うのか？

こうして、マルクス経済学者をして「労働生産物が商品形態をとるかぎり、金は貨幣の王座をけっしてさらさない、というのがマルクス貨幣理論の帰結なのだ」と確信せしめる源となっている貨幣の価値尺度機能とは、本当のところいかなるものであるのか、いざ確かめにかかってみると、案に相違してマルクス経済学者の理解がそれほど明晰ではないという事実、少なからず驚かされるのである。そこで私は、先年、マルクスの「価値尺度」論を改めて確認し直し、三宅教授の所説に代表される通説的な価値尺度論の問題点を検討して、その結果を二つの拙稿にまとめて発表した¹⁰⁾のであるが、その

後、はからずも三宅教授から拙論に対する御回答を頂き、併せて私の不明についても厳しい御指摘を頂く機会に恵まれた¹¹⁾。けれども、残念なことに教授のおっしゃることが私には未だよく呑み込めないで、以下に私の疑問とするとこを述べて、いま一度三宅教授の御高教を仰ぎたいと思う。

〔I〕「測定するのではない」か？

前掲の拙稿〔1〕において、私はマルクスの「価値尺度」規定を再確認して次のように述べた（長々と引用することになるが、以下の議論の出発点であり、土台をなすものであるので、寛恕されたい）。

「周知のように、マルクスは『資本論』第1部第3章の第1節を『価値の尺度』と題し、その冒頭で次のように述べている。

『金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること、または、諸商品価値を同名の大きさ、すなわち質的に同じで量的に比較の可能な大きさとして表わすことにある。こうして、金は諸価値の一般的尺度として機能し、ただこの機能によってのみ、金という独自の等価物商品はまず貨幣になるのである。

諸商品は、貨幣によって通訳可能になるのではない。逆である。すべての商品が価値としては対象化された人間労働であり、したがって、それら自身として通訳可能だからこそ、すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で共同に計ることができるのであり、また、そうすることによって、この独自の商品自分たちの共通な価値尺度すなわち貨幣に転化させることができるのである。価値尺度としての貨幣

9) Karl Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, 13. Band, S. 50. カール・マルクス『経済学批判』（『マルクス＝エンゲルス全集』第13巻所収《杉本俊郎訳》）、49ページ。傍点＝マルクス。なお、以下で本書から引用する場合には、Kr. と略記し、*Werke* 版原書のページ数と共に各引用文の末尾に付記する（訳文はすべて邦訳『全集』版の杉本俊郎氏の訳による）。

10) 拙稿「マルクスの『価値尺度』論について——宇野弘蔵氏のマルクス批判を手掛りに——」（阪南大学『阪南論集 社会科学編』第20巻第3号所収）、同「通説的価値尺度論の問題点について——久留間敏造・三宅義夫両氏の所説の検討——」（同前誌、同巻第4号所収）参照。なお、以下では、前者を「拙稿〔1〕」、後者を「拙稿〔2〕」と略称する。

11) 三宅義夫「貨幣の価値尺度機能——それについての誤解に寄せて——」（中央大学『商学論叢』第28巻第5・6号所収）参照。以下、この論文から引用する場合には「三宅〔1〕」と略称して、各引用文の末尾にページ数とともに付記する。

は、諸商品の内在的な価値尺度の、すなわち労働時間の、必然的な現象形態である。』(K. I, S. 109.)

従来、この文章の前段部分がよく引用され、マルクスの言う貨幣の価値尺度機能とは『価値表現の材料』となることだ、と解されるのが通例である。もちろん、マルクスは『金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること』にあると明確に述べているのであるから、マルクスの言う貨幣の価値尺度機能とは価値表現の材料になることだ、と解すること自体は全く正当なことである。しかし、だからといって、マルクスがすぐ続けて、『金は諸価値の一般的尺度として機能』する、と述べている点を無視してよいわけではない。と言うのも、もし貨幣の価値尺度機能が価値表現の材料になることだけにあるならば、何もわざわざ“諸価値の一般的尺度として機能する”などと、徒に人を惑わすような言い換えをする必要はないからである。』(50ページ。)

ここで私が「もし貨幣の価値尺度機能が価値表現の材料になることだけにあるならば、何もわざわざ“諸価値の一般的尺度として機能する”などと、徒に人を惑わすような言い換えをする必要はない」と述べているのは、久留間鮫造が宇野弘蔵を批判したときの論法が頭にあったからである。すなわち「宇野君にあっては、価値を尺度するということは、与えられた価値の大きさを尺度することではなく、価値の大きさそのものをきめること、本来的には存在しない価値の量的規定をはじめてつくり出すこと、を意味しているように思われる」が、これは「まことに異常な『尺度』という言葉の使い方だ。「もちろん、ある言葉をどういう意味に使うかは、ある程度までは使う人の勝手といえるが、それにもおのずから限度がある。」「宇野君の価値尺度論は、尺度という言葉を通じて普通の意味に解する限り、もともと価値尺度論と呼ばれる

べきものではなく、別の名称を与えられるべきものなのです。』と¹²⁾。まさしく久留間の言うとおりのことであって、「尺度という言葉を通じて普通の意味に解する限り」、「価値を尺度するということは、与えられた価値の大きさを尺度すること」でなければならない。「価値の尺度」と言えば“価値の大きさを計るための尺度”ということではなければならない。「もちろん、ある言葉をどういう意味に使うかは、ある程度までは使う人の勝手といえるが、それにもおのずから限度がある。』といったマルクスは、その「限度」を弁えていたのか、いなかったのか？その点を確かめるために私は上の引用文の末尾でマルクスが「諸商品の内在的な価値尺度」と言っている場合の「尺度という言葉」の用語法を調べてみたのであって、その上で次のように述べたのである。

「明らかに、マルクスが『内在的な価値尺度』と言っている場合の価値尺度とは、文字どおり“価値の大きさを計るための尺度”という意味なのである。

マルクスが“諸価値の一般的尺度として機能する”と言っている場合も決して例外ではないのであって、“諸価値の一般的尺度”とは“価値の大きさを計るための一般的尺度”の謂にほかならない。現に彼は先の引用文の後段部分において、『すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の一商品で共同に計る』『ことによって』『この独自の一商品を自分たちの共通な価値尺度』『に転化させる』、と述べているのである。

このようにマルクスは『尺度』という言葉に至極普通の意味で用いているわけであるが、考えてみればこれは全く当然のことではなければならない。なぜなら、元来『価値形態』は、ただ価値一般だけではなく、量的に規定された価値すなわち価値量をも表現しなければならぬ』(K. I, S. 67) のであるが、“量

12) 久留間鮫造『貨幣論』大月書店、1979年、225-226ページ参照。

の表現”というものが一般にそうであるように、価値量も何かを尺度として計られることなしにはもともと表現さるべくもないからである。そして、長さを計るためには何かの長さを尺度としなければならず、重さを計るためには何かの重さを尺度としなければならないのと同じように、価値量を計るためには何かの価値量を尺度としなければならないこと、言を待たない。金が『諸価値の一般的尺度』とされ、諸商品の価値量が金の価値量を尺度として計られるからこそ、諸商品の価値量は応分の金量を以て表現されうるのである。

だからこそマルクスは貨幣の価値尺度機能を言わば二重に規定しているのであって、彼の言う貨幣の価値尺度機能とは、諸商品の価値を計るための尺度となることによって、諸商品の価値を表現するための材料となる、ということなのである。しかもこの場合、“諸商品の価値を計るための尺度となる”という規定を仮に『第1規定』と呼ぶことにし、“諸商品の価値を表現するための材料となる”という規定を『第2規定』と呼ぶことにすれば、『第1規定』の方がより根源的な規定であることは明らかであろう。」(51ページ)

このように、私の理解ではマルクスの「尺度という言葉」の用語法は至極普通のものであって、「限度」を越えて「使う人の勝手」を行使しているものでは全然ない。ところがこれに対して、「尺度という言葉は普通の意味に解する限り」「価値を尺度するということは、与えられた価値の大いさを尺度すること」でなければならぬと力説している当の本人が、「価値を尺度する」という肝心の一面を「量的側面」だとして度外視して、貨幣の価値尺度機能を次のようにしか規定しないのである。すなわち、「価値の価格としての表示は、貨幣としての金の媒介によってはじめて可能なのであり、この媒

介的な機能において、貨幣金は価値の尺度なのである。」¹³⁾と。これでは、私ならずとも問わざるをえまい。「それがいかなる意味で『尺度』だと言われるのか？」(拙稿[2], 79ページ)と。

三宅教授の場合も同様であって、先にも見たように、「往々誤って解されているように、金の価値をもって諸商品の価値を測定するのではない。」と言われて、現にマルクスが価値尺度の規定として明確に述べている“価値の大きさを計るための尺度”という一面を、まるで誰かの誤解の産物でしかないかのようにいとも簡単に否定された上で、なおかつ「商品がその価値を貨幣商品金で表現するばあい、金は価値の一般的尺度として、つまり価値尺度として機能しているのである」と規定される。だから私は、久留間説の検討を終えて三宅説の検討に入る際に、次のように指摘したのである。「こうした規定は、すでに見た久留間氏のそれと軌を一にするものであるから、ここでもまず、久留間氏に対してと同様に、もし貨幣の価値尺度機能が真に三宅氏の言われるようなものであるとするならば、それは“価値の(一般的)表現材料”とでも呼ばれて然るべきであるのに、何故にわざわざ『誤解されやすい』『尺度』などという言葉を用いなければならないのか、ということが問われうる」(拙稿[2], 84ページ)、と。これに対して、三宅教授は次のように言われる¹⁴⁾。

「私の記していた文は、これを短くすれば、

14) 別の個所では、次のようにも言われている。

「貨幣の価値尺度機能はいいかえれば価値表現機能なのであるから、価値尺度という語は使わないほうがよいという意見もありうるであろうが、そうすると価値の内在的尺度の現象形態にほかならないということが、したがってまたその本質との関係がはっきりでないことになるし、また、従来の経済学において貨幣の価値尺度機能と呼んで、かつそこでの理解の混乱が生じていたのにたいしてマルクスがそれに正しい規定を与えたという意味が、これまたはっきり出ないことになる。」(三宅[1], 163ページ)

しかし、私の理解では、マルクスの用語法はこういう意味付けを少しも必要としないのである。

13) 同前, 178ページ。

『商品がその価値を貨幣商品金で表現するばあい、金は価値尺度として機能している』ということになる。またこれをいい変えれば、金の価値尺度機能というのは、諸商品の価値を表現することである、あるいは諸商品にたいしてその価値表現の材料となることである、ということになる。ところが松田氏の考えでは、価値を『尺度』するというのは価値を『表現』することとはちがう、価値を『表現』することは価値を『尺度』することとはちがう。したがってこれを価値尺度機能と呼ぶのはおかしい、とっておられるものと見受けられる。(三宅[1], 155ページ。)

たしかに私は、「価値を『尺度』するというのは価値を『表現』することとはちがう、価値を『表現』することは価値を『尺度』することとはちがう」と言っている。けれども——別の箇所教授が「そもそも『尺度』という言葉の意味はというように考えても、辞典を調べれば分かるというものではないのである。」(同前, 162ページ)と宥められているので、念のために断わっておきたいのであるが——、私は単純に「したがってこれを価値尺度機能と呼ぶのはおかしい」と言っているのではない。そうではなくて、マルクスが価値尺度の規定として挙げている二つの面——“価値表現の材料となる”という面と“価値を計るための尺度となる”という面——のうち、“価値を計るための尺度となる”という一面を三宅教授が真っ向から否定され、“価値表現の材料となる”ことだけが貨幣の価値尺度機能だと言われるから、それだけなら「これを価値尺度機能と呼ぶのはおかしい」と言っているのである。だから問題は、マルクスが「すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自な一商品で共同に計ることができるのであり、また、そうすることによって、この独自な一商品を自分たちの共通な価値尺度すなわち貨幣に転化させることができるのである」と述べている部分を、私が「『すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自な一商品で共同に計

る』『ことによって』『この独自な一商品を自分たちの共通な価値尺度』『に転化させる』、と述べているのである」と解して、マルクスが「価値尺度」と言う場合には“価値を計るための尺度”というその語が本来意味する普通の意味が含まれているのだ、と主張していることが、正しいのか、正しくないのか、ということではなければならない。ところが残念なことに、三宅教授はその点にはいっさい触れられることなしに、上記の如き私のマルクス「価値尺度」論理解を「無理な、珍奇な解釈」だと批判されて、次のように言われるのである。

『『資本論』の『価値の尺度』のところマルクスは前掲のように、『金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること……にある。こうして、金は諸価値の一般的尺度として機能し、ただこの機能によってのみ、金は……まず貨幣となるのである』と説明しているのであるが、松田氏はこの『こうして (so)』を無視して、『価値表現の材料を提供する』機能と『諸価値の一般的尺度として機能』することを切り離し、そしてふたたび『こうして』を無視して行文の順序を逆にして、後者を『第1規定』とし、前者を『第2規定』として、『諸商品の価値を計るための尺度となることによって、諸商品の価値を表現するための材料となる』とマルクスは言っているのだ、としておられるわけである(上の傍点は、氏が自分の文章にここが肝心なのだという意味でご自身で付している傍点である。ここが誤りであると指摘して——同時にそういう役をしているとはいえ——私が付した傍点ではない。念のため)。このようにたんに形式的に見ても——内容のおかしさは措くとしても——、松田氏の見解は『彼〔マルクス〕の価値尺度機能』の解釈としてはまことに無理な、珍奇なものとなっているのである。無理な、珍奇な解釈を提唱しておられるのである。(三宅[1], 158ページ。後の方の傍点—三宅教授。)

たしかに、「価値の尺度」についてのマルクスの叙述の前段部分だけを見れば、“価値表現の材料となる”という規定と“諸価値の一般の尺度として機能する”という規定とをことさらに区別し、あまつさえ『こうして』を無視して行文の順序を逆にして、後者を『第1規定』とし、前者を『第2規定』として」いる私の議論は、「無理な、珍奇な解釈」を試みているにすぎないものの如くに見えるに違いない。けれどもそれは、あくまでも、「価値の尺度」についてのマルクスの叙述の前段部分だけしか見ず、後段部分や『経済学批判』におけるマルクスの叙述には敢えていっさい目をつぶっている限りでのことでしかないのである。本稿でも繰り返し指摘しているように、「価値の尺度」についてのマルクスの叙述の後段部分では、「すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自な一商品で共同に計ることができるのであり、また、そうすることによって (dadurch), この独自な一商品を自分たちの共通な価値尺度すなわち貨幣に転化させることができるのである。」と明言されており、『経済学批判』では(拙稿[1]でも引用しておいたように)明快に次の如く述べられているのである。

「すべての商品がその交換価値を金で、一定量の金と一定量の商品とが等しい大きさの労働時間をふくんでいる割合におうじて測るから、金は価値の尺度となる。そして金が一般的等価物すなわち貨幣となるのは、さしあたっては、ただ価値の尺度としてのこの規定性によってだけであって、価値の尺度としての金自体の価値は、直接に商品等価物の範囲全体で測られるのである。他方では、いまやすべての商品の交換価値は、金で表現される。」(Kr., S. 50. 傍点一引用者。)

「もし諸商品が全面的にその価値を銀または小麦または銅で測り、したがって銀価格、小麦価格、または銅価格としてあらわすならば、銀、小麦、銅は価値の尺度となり、こうして一般的等価物となるであろう。」(Eben-

da, S. 51. 傍点一引用者。)

私はこのようなマルクス自身の叙述に基づいて、「マルクスが『価値尺度』と言う場合には“価値を計るための尺度”というその語が本来意味する普通の意味が含まれているのだ」と主張しているのであり、また、そのようにマルクス自身が、一方では“貨幣の価値尺度機能とは「価値表現の材料」となることである”と規定し、他方では“貨幣の価値尺度機能とは価値を計るための「一般の尺度」となることである”と規定しているが故に、「彼の言う貨幣の価値尺度機能とは、諸商品の価値を計るための尺度となることによって、諸商品の価値を表現するための材料となる、ということなのである。」と解しているのであるにすぎない¹⁵⁾。然るに、それにもかかわらず三宅教授は、あたかも私が「価値の尺度」についてのマルクスの叙述の前段部分だけを専ら語義論の視点から解釈して“「価値表現の材料」となること”と“諸価値の一般の尺度”となること”とを無理矢理に切り離しているかのように曲解され、その上で、またもや専ら「価値の尺度」についてのマルクスの叙述の前段部分だけを引合いに出されて、拙論を「無理な、珍奇な解釈」だと批判されるのである。

これでは、しかし、拙論批判としては片手落ちであると言うほかあるまい。それどころか、そのようにして三宅教授が、私が自説の典拠として挙げているマルクスの叙述をすべて黙殺さ

15) もしも貨幣の価値尺度機能に“価値表現の材料となる”という一面と“価値を計るための尺度となる”という一面とがあるとすれば、後者を「第1規定」とし、これをより根源的な規定であるとしてもさしつかえないということは、三宅教授もこれを間接的に認めておられる(三宅[1], 171ページ参照)。だから問題は、あくまでも、マルクスの規定における「価値の尺度」には“価値を計るための尺度”という一面があるのか否か、ということなのである。然るにこの点について一向に明らかにされないままに三宅教授が拙論を批判されているのは、私には何とも不思議でしかたがない。

れ、ひたすら「価値の尺度」についてのマルクスの叙述の前段部分だけに依ってマルクスの「価値尺度」論を解釈しようとされている、という事実は、却って教授のマルクス「価値尺度」論理解の一面性を窺わせるに十分なものであろう。実際、三宅教授に倣って「往々誤って解されているように、金の価値をもって諸商品の価値を測定するのではない。」と断言するためには、現にマルクスが述べていることをことごとく無視するという荒業をこなさなければならないのである。

【Ⅱ】「価値表現」はいつでも可能か？

ところで、私のマルクス「価値尺度」論理解を「無理な、珍奇な解釈」だとして批判される三宅教授は、私がそうした「無理な、珍奇な解釈をするにいたってしまった」「そもその病根」を探し出されて、次のように教示される。

「松田氏は言われる、——『“量の表現”というものが一般にそうであるように、価値量も何かを尺度として計られることなしには表現さるべくもない』、『長さを計るためには何かの長さを尺度としなければならず、重さを計るためには何かの重さを尺度としなければならぬと同じように、価値量を計るためには何かの価値量を尺度としなければならぬこと、言を待たない』。そして言われる、——『諸商品の価値量が金の価値を尺度として計られるからこそ、諸商品の価値量は応分の金量を以て表現されうるのである』と（同上第3号〔拙稿〔1〕〕、51ページ）。こういう理解——誤った理解であるから誤解であるが——があるので、さきに見たようにマルクスの記述を二つに切り裂き、一方は価値を表現する材料となることを述べているのであり、他方は価値を計る尺度となることを述べているのだ、という無理な、珍奇な解釈をするにいたってしまったわけである。そもその病

根はここなのである。」（三宅〔1〕、158—159ページ。〔 〕内——引用者。）

ここで三宅教授が私の理解を「誤った理解であるから誤解である」と言われるのは、教授の御理解では「貨幣が価値尺度として機能するその『尺度』として機能する仕方は、『長さを計るためには何かの長さを尺度としなければならず、重さを計るためには何かの重さを尺度としなければならないのと同じように』というのではない」（同前、162ページ。傍点—三宅教授）からであるが、このように“「価値の尺度」と言う場合の「尺度」は長さや重さの場合の尺度と同じではありえないのだ”とする考え方は、元をただせば宇野弘蔵がマルクスの所説を批判する際に自らの依り拠としていたものにほかならないのであって、周知のとおり宇野は、次のように述べてマルクス「価値尺度」論の批判を始めたのである。

「一般に、価値尺度としての貨幣の機能は、商品がその価値を価格として表現することにあるとせられている。『資本論』も大体そうしている。従来、私もそれにしたがって来たのであるが、それでは価値の尺度としての特異な性格が把握出来ないように考えられる。商品の価値は、吾々が常識的に考える長さや重さのように単なる尺度をもって計量せられ得るものではない。物指にしてもあてて見なければ長さは計られないが、あててみれば計量出来る。商品ではそういうふうにより外的には計量出来ない。」¹⁶⁾

宇野説を厳しく批判した久留間敏造も、その点では宇野と瓜二つであった。すなわち、「〔商品生産者の労働が〕はじめから社会的労働としてあるなら、その分量は労働時間できまり、労働時間は時計ではかることができるわけで、その場合には物指で空間的な長さをはかるのと本

16) 宇野弘蔵『経済原論 上巻』岩波書店、1950年、43ページ。

質的な違いはない。ところが価値の場合にはそうではない。」¹⁷⁾と。そこで私は拙稿[2]において、次のように指摘したのである。

「たしかに、商品の価値が『外部的に』『物指で空間的な長さをはかるのと本質的な違いはない』ような仕方では計量されうるものではない、ということは両氏の言われるとおりなのである。自明の事柄だと言ってよい。しかし、そうした自明の事柄に照らして見ればすこぶる奇妙なことに、マルクスは現に、『外部的に』『物指で空間的な長さをはかるのと本質的な違いはない』ような仕方では計量されうるものとして論じているのである。」(81ページ)

そして「例えば」として、マルクスが「すべての商品が価値としては対象化された人間労働であり、したがって、それら自体として通訳可能だからこそ、すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で共同に計ることができる(る)」と述べている今やおなじみの個所を挙げておいたのであった。上來々述べているように、「マルクスは現に、『外部的に』『物指で空間的な長さをはかるのと本質的な違いはない』ような仕方では計量されうるものとして論じている」ということは(マルクスの文章を成心なく読む限り)あれこれ解釈する必要もないくらい明白なのである。だから、マルクスの「価値尺度」論を本当に理解するためには、「ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえてやうがない」ということを百も承知の上で、何故にマルクスは「すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で共同に計ることができる」などと言うのか、という点こそが解明されなければならないのであるが、残念なことに三宅教授は、相変わらず宇野弘蔵以来の「常識」に固執されて、次のように言われてしまうのである。

17) 久留間, 前掲書, 182ページ。

「諸商品の価値の大きさはその商品を生産するのに社会的に必要な労働量によって決定されるが、労働量を計るものは労働時間である。このように諸商品の価値の大きさを計る尺度は時間であるが、しかしその社会的必要労働時間は直接にそれぞれ何時間と計ることはできない。」(三宅[1], 161ページ)

「長さや重さもちがって、商品の価値は社会的なものであるから、直接にその大きさをどれだけと表示することはできない。他の商品との交換関係で自らを表示するほかない。いいかえれば、この交換関係においてその価値の大きさが表わされているのである。」(同前, 175ページ)

だが、計ることのできない価値の大きさをどうして表現することができるのであろうか? かつて宇野は「物の重さや、長さでもあれば、秤や物指をもってすればよいわけであるが、商品の価値は、貨幣で表現されたからといってもなおはかられたとはいえない。実は秤にかけないで重さを表現するのに相当する。」¹⁸⁾と述べたことがあるが、同様に三宅教授も、商品の価値はその大きさがどれだけであるか分からなくてもその大きさが表現できるようなそんな摩訶不思議な存在なのだ、本当にお考えなのであろうか?

たしかに三宅教授の言われる如く、商品の価値は「他の商品との交換関係で自らを表示するほかない」。そのことは、すでに見たようにマルクスも明確に指摘している。「諸商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的な単位の諸表現であるかぎりでのみ価値対象性をもってこのだということ、したがって商品の価値対象性は純粋に社会的であるということ思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにはしか現われえないのだということもまたおのずから明らかである。」と。だが、くれぐれも注意せよ。商品の価値は「他の商品

18) 『宇野弘蔵著作集』第3巻, 岩波書店, 1973年, 474ページ。傍点一引用者。

との交換関係で自らを表示するほかない」のだということ（または、「価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちには現われえないのだということ」と、「この交換関係においてその価値の大きさが表わされているのである」ということ（または、「価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうち」に現われているのであるということ）とは、必ずしも同じことであるとは限らないのだ。「幽霊は墓場にしか現われえない」という話を聞いて「幽霊はいつでも墓場に現われているのだ」と思い込むのが早とちりであるように、「価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちには現われえない」という命題を知って「商品の価値の大きさはいつでも商品と商品との交換関係のうちに現われているのだ」と思い込むのも早とちりなのである。

この点は論理的には自明のことだと思われるのであるが、それにもかかわらず、三宅教授ほどの方が、上の引用文に見られるように何の留保条件も付されることなく、「(商品の価値は)他の商品との交換関係で自らを表示するほかない」という命題を「いいかえれば」「この交換関係においてその価値の大きさが表わされているのである」という命題になる、とされてしまっているのであって、教授がマルクスの「価値尺度」論を誤解してしまわれた「そもそも病根」は、あるいはここに伏在しているのかもしれない。けれども、今はその点に深入りはすまい。ともかくにも、それほど三宅教授にあっては「商品の価値の大きさはいつでも商品と商品との交換関係のうちに現われているのだ」という思い込みが激しい、ということなのである。

しかし、計ることができず、したがって知ることのできない価値の大きさをどうして表現することができるのか？「何人も自分の認識していない(認識しえない)事物を表現することはできない」ということは、誰にも否定しえない真理なのではないのか？それとも、価値(の大きさ)だけは例外なのか？

三宅教授は次のように言われるのである。

「労働時間が労働量の尺度である場合は、時間であるから計るという尺度の作用の仕方が一目瞭然であるが——といっても、その商品を生産するために社会的に必要な労働時間は直接には計ることができないのであるが——、それにたいして貨幣が価値の外在的尺度として機能する場合は、同じく尺度といっても、尺度の作用の仕方が、諸商品が貨幣との交換関係において、つまり交換される金の重量で、相対的にその価値の大きさを表わすという形をとるのであって、一目瞭然たるものではない。」(三宅[1], 161—162ページ)

「価値の尺度」の場合「尺度の作用の仕方」は「一目瞭然たるものではない」けれども、とにかく諸商品は「貨幣との交換関係において、つまり交換される金の重量で、相対的にその価値の大きさを表わす」のだ、と言われるわけである。本当だろうか？本当に諸商品は「貨幣との交換関係において、つまり交換される金の重量で、相対的にその価値の大きさを表わす」ことができるのだろうか？この問題を考える場合には、しかし、三宅教授が他方では次のようにも主張されているという事実に注意しなければならない。

「そもそも、20エレのリンネル=1着の上着という交換関係、x量の商品A=y量の金という交換関係において、20エレのリンネルの生産に社会的に必要な労働時間は直接に目に見える形で何時間と分かるものではないし、またこのことは1着の上着にしても同様である。リンネルは自分に上着を等置する場合、1着の上着は自分と等しい労働量の体化物たるものとして等置するのであるが、その場合両者に含まれている社会的必要労働量がキチンと同じであるには、両者のそれぞれが分かっているのではなければならない。分かっているならば双方を同じにすることはできない。したがって

両者の価値量が同じであることはむしろ異例であるといつてよい。」(同前, 168ページ。傍点—三宅教授)

見られるように三宅教授は、商品は自分に金のある分量を等置する際、自分の価値の大きさも自分に等置する金のある分量の価値の大きさも知らずして、なおかつその分量の金の価値の大きさが自分の価値の大きさと等しい「ものとして等置するのである」、と言われる。要するに商品はでたらめをやってるわけだから、「したがって両者の価値量が同じであることはむしろ異例である」のが当たり前なのである。どうして商品がそんなでたらめをしなければならぬのか、また、実際にそんなでたらめをするものなのかどうか、私には全く見当もつかないが、さしあたってはその点を措くとすれば、たしかに、実際の具体的な(と言ってももちろん単純流通の範囲内でのことであるが)交換関係において等置される商品と金の「両者の価値量が同じであることはむしろ異例であるといつてよい。」

こうして三宅教授も言われているように、実際の具体的な交換関係においては、等しい大きさの価値を有する諸商品に等しい分量の金が等置されるとは限らず、互いに異なった大きさの価値を有する諸商品に一個同一の分量の金が等置されないと限らない。然るに三宅教授は、それでも“諸商品は「貨幣との交換関係において、つまり交換される金の重量で、相対的にその価値の大きさを表わす」ことができる”と言われ、“商品の価値の大きさはいつでも商品と商品との交換関係のうちに現われているのだ”と主張されるのである。そこで今、以下のような関係が成立しているものと仮定してみよう。

Aグループ	Bグループ
1足の靴 = 14gの金	1本のネクタイ = 3gの金
1着の背広 = 15gの金	1着のワイシャツ = 3gの金
1個の靴 = 16gの金	1本のバンド = 3gの金

ここでAグループの商品は互いに価値の大き

さが等しいものとし、Bグループの商品は互いに価値の大きさが異なるものとすれば、上の関係が意味していることは、同じ大きさの価値が相異なった分量の金で「表現」され、相異なった大きさの価値が一個同一の分量の金で「表現」される、ということであり、「表現」される価値の大きさと「表現」する金の分量の間には「一対一対応」の関係は存在しない、ということにはほかならない。これでは、しかし、それぞれに等置されている14gの金と15gの金とを比べて1着の背広の価値の方が1足の靴の価値よりも大きいと知ることができるわけではないし、同じ3gの金がそれらに等置されているからといって1本のネクタイと1本のバンドとが等しい大きさの価値を含んでいると判断してよいわけでもないのであって、つまりは、ある商品に等置されている金の分量を見てもその商品の価値の大きさを(絶対的にはもちろん相対的にさえ)知ることができないのである。いったい、これでどうして、“商品の価値の大きさはいつでも商品と商品との交換関係のうちに現われているのだ”と言えるであろうか? 言えるわけがない。現にマルクスは「金の第一の機能は、……諸商品の価値を同名の大きさ、すなわち質的に同じで量的に比較の可能な大きさとして表わすことにある。」と述べているのであるが、諸商品の価値の大きさが金の分量において「量的に比較の可能な大きさ」として表わされていると言いうるためには、ある商品に等置されている金の分量を見ればその商品の価値の大きさを(少なくとも相対的には)知ることができるのでなければならないこと、論を待たない。実際の具体的な交換関係を問題にする限り、“商品の価値の大きさはいつでも商品と商品との交換関係のうちに現われているのだ”などと軽々に言うことはできないのである。

「x量の商品A=y量の金」という関係においてx量の商品Aの価値の大きさがy量の金で表現されている、と言いうるためには、表現される価値の大きさと表現する金の分量との間に必ず「一対一対応」の関係が存在していなければ

ばならない。例えば、上のAグループでは価値の大きさから見て(1個の鞆)>(1着の背広)>(1足の靴)という関係があり、Bグループではどの商品も互いに価値の大きさが等しいという関係がある、というふうに、等しい大きさの価値を含む商品には等しい分量の金が等置され、より大きな価値を含む商品にはより多くの分量の金が等置される、という関係が成立して初めて、「x量の商品A=y量の金」という関係においてx量の商品Aの価値の大きさがy量の金で表現されている、と言っているのである。なぜなら、そういう場合に初めて、ある商品に等置されている金の分量によってその商品の価値の(相対的な)大きさをはっきりと知ることができるのだから¹⁹⁾。

しかしまた、表現される価値の大きさと表現する金の分量との間に「一対一対応」の関係が成立しうするためには何はともあれ表現される価値の大きさが分からなければならない、ということも自ずと明らかであろう²⁰⁾。表現される価値の大きさと表現する金の分量との間に「一対一対応」の関係が成立しうするためには、任意の商品に対してその価値の大きさに相応する分

19) 「すべての商品がその価値をたとえば金で表現するならば、これは、それらの金表現、それらの金価格、それらの金との等式、それらの価値関係がそれによって相互に明らかにされ計算されうることになる等式である。」[Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert (Vierter Band des "Kapitals")*], in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 26, 3. Teil, S. 131f. カール・マルクス『剰余価値学説史』Ⅲ, 『マルクス=エンゲルス全集』第26巻第3分冊所収(岡崎次郎・時永淑訳)172ページ。傍点一引用者。以下、本書からの引用に際しては、*Theorien* Ⅲ(第2分冊は*Theorien* Ⅱ)と略記し、*Werke* 版原書のページ数と共に各引用文の末尾に付記する(訳文はすべて邦訳『全集』版の岡部次郎・時永淑両氏の訳による。)

20) 「諸商品が自分たちの交換価値を独立に貨幣で、第三の一つの商品で、ただ一つの商品で、表わすためには—すでに商品価値が想定されているのである。問題はただそれを量的に比較することだけである。」(Ebenda, S. 131. 下線—マルクス。傍点一引用者。)

量の金が等置されうるのでなければならないが、商品は“魔法使い”ではなく、金もまた“魔法の磁石”ではないから、ある商品にその価値の大きさに相応する分量の金がひとりでに等置される、というわけにはいかないのであって、任意の商品に対してその価値の大きさに相応する分量の金が等置されうるためには、“単位価値量に等置されるべき金の分量が定まっており、かつ、その商品の価値の大きさが何単位であるかが分かっている”という条件の充足が不可欠なのである。この条件が満たされていて初めて、“商品の価値の大きさを金の分量で表現する”ということが可能となるのであって、“何人も自分の認識していない(認識しえない)事物を表現することはできない”という平凡な真理は、価値表現の場合にもやはり無視されてはならなかったのである。

〔Ⅲ〕「等価交換」を前提して いるのは誰か？

それにしても、“何人も自分の認識していない(認識しえない)事物を表現することはできない”ということは、あれこれと考えてみるまでもなく明白なことだと思われるのに、三宅教授は何故を以てこの平凡至極な真理を無視されてしまったのであろうか？ この点、私には未だ謎なのであるが、強いて私の感じを述べれば、その謎を解く鍵の一つは、教授が、一方では“価値の大きさは計ることができない”という常識的な見地に立たれながら、他方では(すでに指摘したように)、「価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにはしか現われえないのだ」というマルクスの命題を「いいかえれば」、無条件で“商品の価値の大きさはいつでも商品と商品との交換関係のうちには現われているのだ”という命題になる、と(これまた不思議なこと)に思い込まれてしまったことにあるように思われる。少なくとも、そのように推測すれば、三宅教授が、一方では“価値の大きさは計ることができない”と言われながら、それ

にもかかわらず他方では、その計ることのできない価値の大きさを金の分量でなら表わすことができると、安んじて主張されえた理由が、分かるような気がするのである。

その点はともかく、マルクス自身は、一方では「ある一つの商品をどんなにいじくりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえない」ことを明確に指摘した上で、なおかつ、他方においては「価値の大きさは計られる」としている、という事実は何としても否定のしようがない。上来何度も引用してきたように、現にマルクスは「すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で共に計ることができる」と断言しているのである。そこでマルクスに従って、すべての商品が自分たちの価値を金で計り、そうして自分たちの価値を応分の金量で表現するものとすれば、明らかに価格は必ず価値どおりでなければならない。だから私は拙稿[1]において、次のように述べたのである。

「価値尺度論はマルクス貨幣理論の大宗をなすものであるが、周知のようにその理解は、今日なお区々として定まらない有様である。それというのも、貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの規定からすれば、価格は必ず価値どおりでなければならないからにはほかならない。たとい単純流通を想定しようとも、それだけで価格は常に価値どおりであるとして済ませるわけにはいかないのであって、そのためにマルクスの規定はいかにも不合理なものに見えざるをえないのである。」(49ページ)

実際、「マルクスの規定からすれば、価格は必ず価値どおりでなければならない」というマルクス「価値尺度」論の論理的帰結と、「たとい単純流通を想定しようとも、それだけで価格は常に価値どおりであるとして済ませるわけにはいかない」という一種の現実的認識とは、そうそう簡単には和解し合えないのであって、こ

のままでは、一方を取る者はどうしても他方を捨てざるをえないのである。かくて例えば飯田繁教授は、その論理的帰結と実際の具体的な価格との整合性については黙して語らず、ひたすらマルクスの規定を祖述する、という道を選ばれたわけであるが、そうした方途につくことを潔しとしなかった宇野弘蔵は、「価格は必ずしも価値どおりであるとは限らない」という自明の事実に立脚して、マルクスの「価値尺度」論を批判し、さらに進んではマルクスの「価値」論そのものをも批判する、という道を選ぶこととなった。そして久留間敏造はといえば、「価値表現」における「質の問題」と「量の問題」を区別し、後者を「ブルジョア的なインテレスト」の問題だとして排除することによって、マルクス「価値尺度」論の論理的帰結と実際の具体的な価格との整合性如何を不問に付すという道を選んだのであった。

三宅教授の選ばれた道は、どちらかと言えば久留間のそれに近いが、敢えて妙な言い方をすれば、「近い」と同じくらい「遠い」。と言うのは、久留間と同じように三宅教授も、実際の具体的な売買価格においても相変わらず価値の大きさが表現されているのだと主張され、そうした主張に整合的にマルクスの「価値尺度」論を解釈しようとされているわけであるが、久留間が「量の問題」を言わば「回避」しているのに対して、三宅教授はその「量の問題」をももされていないからである。

事実、教授は次のように主張されている。

「ここで誤解されやすい若干の点について説明をつけくわえておこう。まず価値尺度の尺度という言葉にとらわれて、商品の価値の大きさが大きさどおりに金の分量で表現されることになるのだ、価値尺度というからには、商品価値の大きさを価値どおりに測定し表示するのでなければならぬ、そうでなければ価値尺度として機能するということが意味をなさない、と考えてはならない。x量の商品Aの価値の大きさはx量の商品A=y量の

金として表現されるのであるが、この相対的価値表現においては、価値形態、価値表現においてつねにそうであるように、双方に含まれている社会的必要労働時間が等しいことを必ずしも意味しているのではない。Y量の金はX量の商品Aの価値の大きさの表現として、あるいは過小でありあるいは過大であるかもしれない。しかし過小であろうと過大であろうと、Y量の金は等価形態にあり、X量の商品Aの等価物であることに変わりはないのである。(三宅[2], 235ページ。)

しかし、実際にマルクスの叙述に当たってみれば直ちに明らかなように、上の引用文において三宅教授が主張されていることはマルクスが実際に述べていることとはまるで違っているのである。だから私は拙稿[2]において『資本論』や『剰余価値学説史』からマルクスの叙述を引きつつその点を指摘したわけであるが、念のために、マルクスが実際に述べていることと三宅教授が主張されていることとの違いをもう一度整理して示せば、以下のようなことになるであろう(拙稿[2], 84-85ページ参照)。

マルクス：「(諸商品は) 等量の労働時間を表わすかぎり、等しい大きさの価値、等価物である。」(Theorien III, S. 125.)

三宅教授：「X量の商品Aの価格がY量の金であるとき、このY量の金の価値の大きさがX量の商品Aのそれよりも大きかろうと小さかろうと、Y量の金は「X量の商品Aの等価物であることには変わりはない。」

マルクス：「『20エレのリンネル＝1着の上着または、20エレのリンネルは1着の上着に値する』という等式は、1着の上着に、20エレのリンネルに含まれているのと同じ量と同じ量の価値実体が含まれているということ、したがって両方の商品量に等量の労働または等しい労働時間が費やされているということを前提する。」(K. I, S. 67.)

「この〔上着とリンネルとが交換される〕

割合は、リンネルの価値量が与えられているのだから、上着の価値量によって定まる。」(Ebenda, S. 70.) 「たとえば1トンの鉄に含まれている価値、すなわち人間労働の一定量は、同じ量の労働を含む想像された貨幣商品量で表わされる。」(Ebenda, S. 111.)

三宅教授：「X量の商品Aの価値の大きさはX量の商品A=Y量の金として表現されるのであるが、この相対的価値表現においては、価値形態、価値表現においてつねにそうであるように、双方に含まれている社会的必要労働時間が等しいことを必ずしも意味しているのではない。」

もちろん、マルクスがどこで何を述べているかくらいのことを三宅教授が御存じないわけではない。それにもかかわらず一見してマルクスの言っていることとは違うことが明らかなことを教授がわざわざ述べておられるのは、次のような事情による。

「これらの〔松田が例示しているマルクスの〕記述は、一見すると、私が言っているとは『違う』ことをマルクスが述べているように見える、であろうと思われる。マルクスがそこでどういうことを説明しようとしてこう述べているのかということ十分に考慮しないで読むと、そう見えるであろう。そうであるからこそ、私はさきのような注意書きをしておいたのだ。」(三宅[1], 166ページ。〔 〕内一引用者。)

私が上に整理して示したようなマルクスと教授との違いが違いに見えるのは「マルクスがそこでどういうことを説明しようとしてこう述べているのかということ十分に考慮しないで読む」からなのであって、「そうであるからこそ」教授はわざわざマルクスが述べていることは違う「ように見える」ことを「注意書き」として書いておかれたのだ、というわけである。いさ

さか込み入った話ではあるが、三宅教授の言われていることは要するにこういうことなのであろう。すなわち、マルクスが「(諸商品は)等量の労働時間を表わすかぎりで、等しい大きさの価値、等価物である。」と定義していれば、これを“ x 量の商品Aの価格が y 量の金であるとき、この y 量の金の価値の大きさが x 量の商品Aのそれよりも大きかろうと小さかろうと、 y 量の金は「 x 量の商品Aの等価物であることには変わりはない”と読まなければならない、マルクスが「『20エレのリンネル=1着の上着または、20エレのリンネルは1着の上着に値する』という等式は、1着の上着に、20エレのリンネルに含まれているのとちょうど同じ量ノ価値実体が含まれているということ、したがって両方の商品量に等量の労働または等しい労働時間が費やされているということを前提する。」と述べていけば、これを「 x 量の商品Aの価値の大きさは x 量の商品A= y 量の金として表現されるのであるが、この相対的価値表現においては、価値形態、価値表現においてつねにそうであるように、双方に含まれている社会的必要労働時間が等しいことを必ずしも意味しているのではない。」と読まなければならない、そういう読み方こそが「マルクスがそこでどういうことを説明しようとしてこう述べているのかということを十分に考慮」した読み方なのだ、と。

上記の如き三宅教授の「注意書き」は、しかし、私にはさながら“誤読の勧め”のように見えてしかたがない。いったい、「(諸商品は)等量の労働時間を表わすかぎりで、等しい大きさの価値、等価物である。」と定義しているマルクスの文章をどう読み、「マルクスがそこでどういうことを説明しようとしてこう述べているのかということ」をどのように「十分に考慮」すれば、“ x 量の商品Aの価格が y 量の金であるとき、この y 量の金の価値の大きさが x 量の商品Aのそれよりも大きかろうと小さかろうと、 y 量の金は「 x 量の商品Aの等価物であることには変わりはない”と言えるようになるのであろうか？ この点、ぜひとも三宅教授の

御教示を得たいところであるが、幸い教授も啓蒙の必要を感じられたと見えて、次のように言われている。

「私はこういう注意書きで誤解は避けうるのではないかと思ったのであるが、しかし松田氏にはこの注意は通じなく、ただ三宅の言っていることはマルクスのそれとは『違う』としか目に映じなかったことになる。だが、この注意が通じないのは、おそらく松田氏だけではないのではないかとも考えられるので、いますこしこの点について説明をつけ加えておこう。」(三宅[1], 166ページ。)

かくして三宅教授は説明を始められるわけであるが、まず初めに確認しておかなければならないことは、教授が、「等置するとか、等式とか、等価物という形態を与えるとか、等価物として機能しているとか、言う場合、この『等』というのは等しいことであって、等しくないことを示している語ではない、等しくないことを表すために使う語ではない、ということ言うまでもないことなのである。」(同前, 167ページ)と言われて、「等価物」とは「いいかえれば等しい価値を持つ物」(同前)であることを自明のこととして認めておられる、という点である。ならば、しかし、一方でそう言われる当の三宅教授が、他方では“ x 量の商品Aの価格が y 量の金であるとき、この y 量の金の価値の大きさが x 量の商品Aのそれよりも大きかろうと小さかろうと、 y 量の金は「 x 量の商品Aの等価物であることには変わりはない”など言われるのは、どういうわけか？

教授はこう説明されるのである。すなわち、「一商品(x 量の商品A)が他の商品(y 量の商品B)と交換関係を結び、自分に他の商品を等置するさい、この交換は経済外的な拘束や強制は加わっていないとしたもとでの交換なのであって、その点においてこの交換は、両商品に含まれている価値量つまり社会的必要労働量が等しいことを前提としている交換なのである。」

(同前) と。言われていることがどうもよく呑み込めないのであるが、「経済外的な拘束や強制は加わっていない」とするのは誰なのか？

商品自身なのか？ それとも交換関係の分析者なのか？ また、「両商品に含まれている価値量つまり社会的必要労働量が等しいことを前提」しているのは誰なのか？ 商品自身なのか？ それとも交換関係の分析者なのか？

もしも商品自身が「経済外的な拘束や強制は加わっていない」とするのだとすれば、現に「経済外的な拘束や強制は加わっていない」のにことさらに「経済外的な拘束や強制は加わっていない」とする必要はないわけであるから、商品自身がそうする以上は現に「経済外的な拘束や強制」が加わっているからでなければならない。しかし、現に「経済外的な拘束や強制」が加わっているにもかかわらず商品自身が「経済外的な拘束や強制は加わっていない」とするのだとすれば、「その点においてこの交換は、両商品に含まれている価値量つまり社会的必要労働量が等しいことを前提としている交換なのである。」などと言うことは決してできないはずである。のみならず、今の場合は現に「経済外的な拘束や強制」が加わっている事態をわれわれが想定すること自体意味をなさないのであってみれば、ここはどうしても、「経済外的な拘束や強制は加わっていない」とするのは交換関係の分析者の方だ、と考えるほかない。

だが、そうして「経済外的な拘束や強制は加わっていない」とするのが交換関係の分析者の方なのだとすれば、「(交換関係を結んでいる) 両商品に含まれている価値量つまり社会的必要労働量が等しいことを前提」している主体は商品自身ではありえない、ということにならざるをえない。なぜなら、交換関係の分析者がその交換関係には「経済外的な拘束や強制は加わっていない」ものと仮定したからといって、「その点においてこの交換は、(商品自身が) 両商品に含まれている価値量つまり社会的必要労働量が等しいことを前提としている交換なのである。」などと言えるわけがないことは、自明の

ことだからである。かくて三宅教授の上記の「説明」の文脈においては、「経済外的な拘束や強制は加わっていない」とするのが交換関係の分析者であれば、「(交換関係を結んでいる) 両商品に含まれている価値量つまり社会的必要労働量が等しいことを前提」している主体もまた、かの分析者であるほかないのである。

事実、三宅教授の上記の「説明」は、教授が(なぜか)省略された主語を次のように補うことによって初めて、十全に理解されうるものとなるであろう。すなわち、「(交換関係の分析者が) 一商品 (x量の商品A) が他の商品 (y量の商品B) と交換関係を結び、自分に他の商品を等置する (ものとする) さい、この交換は (彼が) 経済外的な拘束や強制は加わっていないと (仮定) したもとでの交換なのであって、その点においてこの交換は、(分析者が) 両商品に含まれている価値量つまり社会的必要労働量が等しいことを前提としている (と仮定したもとでの) 交換なのである。」と。そして、もしも三宅教授の「説明」がそのような補足を許すものであるとするならば、それはマルクスの「価値形態」論の方法に合致している、と言ってよいであろう。なぜなら、マルクスにあってはある商品にその等価物が等置される関係においてその商品の価値が表現されるのであり、それゆえに彼は常に等価交換を前提して「価値形態」論を展開しているからである。ところが三宅教授にあってはその辺のところがいま一つ明確ではないかに見えるのであって、教授はさらに次のように言われてしまうのである。

「x量の商品Aがy量の商品Bに自分との直接的交換可能性を与えるに当たっては、y量の商品Bは自分と等しい価値量を持っているものとしているからにはほかならない。y量の商品Bを自分との等価物、いいかえれば等しい価値を持つ物とみなしているからにはほかならない。y量の商品Bは自分より小さな価値を持つ物であるがこれを持ってくれば自分と交換するとか、自分より大きな価値を持つ

物であるが自分はそれと交換したい、といった交換関係のものではない。すなわち、この点からもこの交換は等価交換を前提としているものであって、不等価交換を前提としているものではない。」(三宅[1], 167ページ)

こうして三宅教授は、「x量の商品A=y量の商品B」という等式においてy量の商品Bがx量の商品Aの等価物であるのは、分析者(たるマルクス)が「両方の商品量に等量の労働または等しい労働時間が費やされている」ということを初めから前提してこの等式を立てているからではなく、x量の商品A自身が実際に「y量の商品Bを自分との等価物、いいかえれば等しい価値を持つ物とみなしているからにほかならない」と言われるわけである²¹⁾が、たしか

21) これがいかに「無理な、珍奇な解釈」であるかは、三宅教授が挙げられている「卑近な例」(三宅[1], 176-177ページ参照)に照らしても十分明らかであろう。教授はこう言われるのである(「当面無用の事情を避けるため、頃はわが国で金兌換制であったときとする」)。すなわち、ある洋服店である背広に35円という値札がついているとした場合のその35円、そして松田がこれを31円50銭に値切って買ったとした場合のその31円50銭、さらには「店主自身が在庫一掃を図って見切り値をつけて、同程度の背広に30円均一の値をつけた」とした場合のその30円、「これらの価格はいずれも背広の価値の貨幣形態であり、貨幣で表現された背広の価値にほかならないのである。」と。この場合、まさに

1着の背広A = (0.75×35.00) gの金

1着の背広A = (0.75×31.50) gの金

1着の背広A = (0.75×30.00) gの金

という三つの等式が立てられるのであるが(最後の等式は三宅教授の挙げられている例と異なるけれども、このように言い換えたからといって教授の言わんとされていることに反するわけでは決してない)、まさか三宅教授も、それぞれの分量の金を「自分との等価物、いいかえれば等しい価値を持つ物とみなしている」のは背広A自身だ、とはさすがに主張されまい。ならば教授は、この場合それぞれの分量の金を1着の背広Aの「等価物、いいかえれば等しい価値を持つ物とみなして

に、x量の商品A自身が「y量の商品Bを自分との等価物、いいかえれば等しい価値を持つ物とみなしている」限りにおいては、かつまた、商品A自身の「主観」の内では、y量の商品Bはx量の商品Aの等価物であるに違いなく、y量の商品Bとの交換は等価交換であるに違いない。けれども、生憎なことに、それではマルクスの見解と真正面から衝突せざるをえないのである。なぜなら、マルクス自身は次のように述べているのだから。

「3重量ポンドのコーヒーと1重量ポンドの茶とが今日交換される、または明日交換されるであろうとすれば、その場合、等価物が相互に交換された、とはけっして言えない。仮りにそうだとすると、商品はいつでもその価値どおりに交換されうることになるであろう。なぜなら、商品の価値は、その商品がたまたまそれと交換される他の商品のまったく任意の量であることになるであろうからである。しかし、3重量ポンドのコーヒーが茶でのその等価と交換されたと言う場合に、人々が一般に考えていることは、こんなことではない。彼らが考えていることは、交換後も交換前と同様に同じ価値の商品が、交換したどちらの人の手のなかにもある、ということである²²⁾。二つの商品の交換される割合が、それらの商品の価値を規定するのではなく、

いる」のは誰だと言われるのであろうか?無論松田ではありえないが、さりとて店主たりうるわけでもない。なぜなら、苟も彼が価値の大きさの表現を意図している限りにおいて、彼は当然、金のいろいろ異なる分量はそれぞれ相異なった大きさの価値を持つ、ということくらいは弁えているはずだからである。

22) ここでマルクスは「(人々=彼らが)考えていること」と言っているけれども、別に彼は、等価交換は主観的なものだ、と言っているわけではない。等価交換という言葉の普通の意味は「交換後も交換前と同様に同じ価値の商品が、交換したどちらの人の手のなかにもある、ということ」だ、と言っているにすぎないのである。誤解の余地はないと思うが、敢えて念のために。

それらの商品の価値が、それらの商品の交換される割合を規定するのである。仮りに価値とは、商品Aがたまたまそれと交換される商品量にほかならないとしたら、どうしてAの価値を商品BやCなどで表わすことができるであろうか？ というのは、その場合、両者の間には内在的な尺度は存在しないので、Aの価値は、このAがBと交換されるより前に、Bで表わされる、ということではできないであろうからである。」(Theorien III, S. 129 f. 下線—マルクス。傍点—引用者。)

見られるとおりマルクスは、実際の具体的な交換関係においてたまたまx量の商品Aがy量の商品Bと交換されたからといって(三宅教授の言われるように)等価物が相互に交換されたとはけっして言えない、もしそんなことを言うなら、商品の価値とはその商品がたまたまそれと交換される他の商品のまったく任意の量だということになってしまい、したがって商品はいつでもその価値どおりに交換されうることになってしまう、そうなるともた二つの商品の交換される割合がそれらの商品の価値を規定することにもなってしまいが、本当は、二つの商品の交換される割合がそれらの商品の価値を規定するのではなく、それらの商品の価値がそれらの商品の交換される割合を規定するのであって、y量の商品Bがx量の商品Aの等価物であると言いうるためには現に両方の商品の価値の大きさが等しくなければならないのだ、と述べているのである。のみならず、マルクスはさらに問うている。「仮りに価値とは、商品Aがたまたまそれと交換される商品量にほかならないとしたら、どうしてAの価値を商品BやCなどで表わすことができるであろうか？」と。これを三宅教授の所説に即して言い換えれば、「(教授の言われるように)「x量の商品Aがy量の商品Bに自分との直接的交換可能性を与えるに当たっては」「y量の商品Bを自分との等価物、いいかえれば等しい価値を持つ物とみなしているからにほかならない」として、x量の

商品Aは、 $a \cdot b \cdot c \dots$ という商品Bの無限の量のなかでただ一つだけy量の商品Bが「自分との等価物、いいかえれば等しい価値を持つ物」であると、いったい何を根拠にみなしうるのであるだろうか？、という問いになるであろう。そこでとりあえず、三宅教授のお答えを拜見することにしよう。

残念なことに、しかし、三宅教授は「x量の商品A=y量の商品B」という関係が成立していることを初めから前提してかかられるだけで、x量の商品Aは何を根拠に商品Bのy量を以て「自分との等価物、いいかえれば等しい価値を持つ物」であるとみなすのかという点については一言も触れられていないのである²³⁾。けれども、おそらくそれが当然の成行きというものであろう。なぜなら、「(諸商品の価値の大きさを決定する)社会的必要労働時間は直接にそれぞれ何時間と計ることはできない」という前提に立つ限り、x量の商品Aが商品Bのy量を以て自分との等価物とみなすその根拠を説明することは、不可能であるにちがいないからである。実際、マルクス自身が上の引用文の中ですでにそのことを指摘している。すなわち、「その場合、両者の間には内在的な尺度は存在しないので、Aの価値は、このAがBと交換されるより前に、Bで表わされる、ということではできないであろう」、と。これを言い換えれば、「商品Aと商品Bの間に「内在的な尺度」が存在しなければ、x量の商品Aの価値を商品Bの

23) もっとも、三宅教授はある個所で次のように言われているので、あるいは教授の御理解では、それが、x商品Aが商品Bのy量を以て自分との等価物であると「みなす」理由であるのかもしれない。すなわち、「価格は価値の大きさの表現であるが、……しかし価格の大きさを決定するのは価値尺度としての貨幣の機能の外部に存在している諸事情——直接には、簡単にいえば需要供給——である。」[三宅義夫「貨幣または商品流通」(種瀬茂他編『資本論体系 2』有斐閣、1984年、所収) 72ページ]と。けれども、商品自身がみなすのだという主張と、「直接には、簡単にいえば需要供給」によって決まるのだという認識とは、そうそう簡単に両立しうるものではあるまい。

Y量で表現することはできない”，ということにほかならない。そして「内在的な尺度」とは、無論、労働時間の謂にほかならないのであるから、かくてマルクスが述べていることは、“商品Aと商品Bの間に労働時間という共通の「内在的な尺度」が存在し、社会的必要労働時間を直接にそれぞれ何時間と計ることができるのでなければ（つまり価値の大きさをそれとして知ることができるのでなければ）、X量の商品Aの価値を商品BのY量で表現することはできない”，ということにほかならないのである。この点は、マルクスが上の引用文よりも少し前の個所に次のように書いているのをみれば、いっそう明らかであろう。

「注意すべきことは、商品は、どの場合にも、前提によれば、その価値どおりに、したがって等価物と交換される、ということである。」(Theorien III, S. 124. 下線—マルクス。傍点—引用者。)

「諸商品がそれに含まれている労働に比例して交換されるということは、諸商品が、同じ労働量を表わすかぎりでは、相等しく、同じものである、ということなのである。」(Ebenda. 傍点—引用者。)

「諸商品が交換されるのは、それらが等量の労働時間を表わす関係においてであるとすれば、対象化された労働としての諸商品の定在、つまり、具体化された労働としての諸商品の定在とは、諸商品の単一性、諸商品の同一要素のことである。このようなものとして諸商品は質的に同じであり、ただ、それらが表わす同一物すなわち労働時間の大小に応じて、量的にだけ区別される。諸商品は、この同一なものの表示としては価値であり、等量の労働時間を表わすかぎりでは、等しい大きさの価値、等価物である。諸商品を大きさとして比較するためには、前もって諸商品が、同名の大きさ、質的に同一なものでなければならない。

このような単位の表示としてこそ、これら

のいろいろなものは価値なのであり、また価値として相互に関係し合うのであって、それによって、それらの価値の大きさの相違、それらの内在的な価値尺度も与えられるのである。また、それだからこそ、一商品の価値は、その商品の等価物としての他の商品の使用価値で表わされ表現されるのである。」(Ebenda, S. 124f. 下線—マルクス。傍点—引用者。)

すでに見たように、マルクスはたしかに「価値対象性は、商品と商品との社会的な関係のうちにはしか現われえないのだ」と述べているけれども、だからといってこれを“商品の価値の大きさはいつでも商品と商品との等置関係のうちに現われているのだ”と読みかえるのは早計なのであって、商品と商品との等置関係において価値の大きさが表現されていると言いうるためには、その等置が「一対一対応」の原則に従って行われているのでなければならない。実際マルクスも“商品の価値の大きさはいつでも商品と商品との等置関係のうちに現われているのだ”などと言っていないのであって、彼がそこにおいて価値表現が行われているとしている等置関係は、ある商品とそれの等価物との——したがって「一対一対応」の原則を満たす——等置関係にほかならないのである。してみれば、価値表現について語るときマルクスが常に「価値どおりに、したがって等価物と交換される」関係を前提しているのは至極当然のことではななく、また、それを価値表現の等式として分析している限りでは、マルクスが「『20エレのリンネル=1着の上着または、20エレのリンネルは1着の上着に値する』という等式は、1着の上着に、20エレのリンネルに含まれているのとちょうど同じ量の価値実体が含まれているということ、したがって両方の商品量に等量の労働または等しい労働時間が費やされているということ」を前提する。」と述べているのも、当り前すぎるくらい当り前のことでしかない²⁴⁾。そし

24) 私はマルクスの「価値尺度」論を合理的に理解

てさらに、ある商品にその等価物が等置されるときに初めてその商品の価値が表現されるのであってみれば、ある商品の価値が表現されるためには価値そのものが測定されるのでなければならぬこと、論を待たない。言い換えれば、価値表現を可能だとすることは価値測定を可能だとすることにほかならぬこと、論を待たない (vgl. *Theorien III*, S. 131f.)。かくて、「価値の尺度」を規定するに際してマルクスが、「金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること、または、諸商品価値を同名の大きさ、すなわち、質的に同じで量的に比較の可能な大きさとして表わすことにある。」と述べた後に、「諸商品は、貨幣によって通訳可能になるのではない。逆である。すべての商品が価値としては対象化された人間労働であり、したがって、それら自身として通訳可能だからこそ、すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で計ることができるのである (る)」と指摘したのは、まさしく理の当然だったのである。

するための鍵を、マルクスが「価値どおりの交換または販売」(*K. III*, S. 197)を仮定して「商品論・貨幣」論を展開している、という事実を直視し、そうした方法をマルクスが採っていることの意味を解明する、という点に求めているのであって、そのことは拙論を一読してもらえば明らかだと思われるのであるが、どういうわけか三宅教授は、拙論を次のように曲解されるのである。

「その説明においてマルクスはなにを明らかにしようとしているのか、説明の眼目としている事柄はどういう事柄か、ということを読み取ることが肝心なのであって、それを抜きにして、あるいはそれから離れて、文面だけを皮相に見ると、マルクスはこの等式は両辺の商品量が等しい価値量をもっていることを意味していると考えているとか、両辺の商品量はつねに等しい価値量のものであると考えている、といったとんでもない誤解が——松田氏のように——生じてしまうのである。」(三宅[1] 168ページ。傍点一引用者。)

「 $A=B$ と考える」ことと「 $A=B$ と仮定する」ことが同じでないことは、「仮定」という言葉の意味を知っている人なら誰でも知っていることではないのだろうか？

[IV] 価値と交換価値

——「むすび」にかえて——

とはいえ、「すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で共同に計ることができる」というマルクスの命題は、われわれにとって決して馴染み易いものではない。それどころか、実際問題として考えてみるなら三宅教授に倣って「(価値の大きさを決定する) 社会的必要労働時間は直接にそれぞれ何時間と計ることはできない」と言うほかないことは、毫も疑問の余地がないのである。しかし、逆に価値の大きさが計られえないものだとすれば、われわれは価値の大きさを知ることができないのであるから、そのような自分の知らない価値の大きさを表現せよと言われても、われわれとしてはただただ途方に暮れるよりほかにはどうしようもないにちがいない。あちら立てればこちらが立たず、こちら立てればあちらが立たない。然るにマルクスは、諸商品の価値の大きさは計ることができ、表現することができる、と言うのである。ならば、われわれは次のように考えるほかあるまい。

- (1) 実際問題として諸商品の価値の大きさを測定することができないのである以上、諸商品の価値の大きさを実際に表現するということは不可能である、と考えるほかない。そして、諸商品の価値の大きさを実際に表現することが不可能だとすれば、実際の具体的な売買価格(または諸商品の交換比率)が諸商品の価値の大きさを表現しているなどということはいえぬ。
- (2) それでもなお諸商品の価値表現を問題にするのであれば、それは「実際問題」とは自ずから次元の異なる問題領域に属するのでなければならぬ。そして、そういう問題次元では当然に諸商品の価値の大きさは測定されるのでなければならぬ。

そこで(1)のように考えるとすれば、直ちに、それでは実際の具体的な売買価格（または諸商品の交換比率）は何を表わしているのか、という問題にぶつかることになる。しかしその点については、すでにマルクスが示唆を与えている。彼はこう述べているのである。すなわち、「生産物交換者たちがまず第一に実際に関心をもつのは、自分の生産物とひきかえにどれだけの他人の生産物が得られるか、つまり、生産物がどんな割合で交換されるか、という問題である。」(K. I. S. 100) と。たしかにこう言われてみると、一方では価値の大きさはそれとしては誰にも分からないとしておきながら、他方では生産物交換者たちに彼らの知ることのできない価値の大きさに関心を持たしめ、あまつさえそれを表現せしめようとする議論は、いかにも無理があるように思えてならないが、さらにマルクスが次のように述べているのを見ると、その思いはひとしお深い。

「商品は、自分で市場に行くことはできないし、自分で自分たちを交換し合うこともできない。だから、われわれは商品の番人、商品所有者を捜さなければならない。商品は物であり、したがって、人間にたいしては無抵抗である。〔中略〕これらの物を商品として互いに関係させるためには、商品の番人たちは、自分たちの意志をこれらの物にやどす人として、互いに相対しなければならない。したがって、一方はただ他方の同意のもとにのみ、すなわちどちらもただ両者に共通な一つの意志行為を媒介としてのみ、自分の商品を手放すことによって、他人の商品を自分のものにするのである。」(K. I. S. 99. [] 内一引用者。)

生産物交換者たちにとっては、「自分の生産物とひきかえにどれだけの他人の生産物が得られるか」ということはまさに死活問題であるけれども、自分の生産物がどれだけの社会的必要労働量を費やしているかなどという問題は、お

そらく普通には直接の関心事ではありえず、ましてそれを表現しようなどとは夢にも思わないに違いない。然るに、自分たちの生産物に他人の生産物を等置して「 x 量の商品A = y 量の商品B」という等式を立てるのは、紛れもなくそういう生産物交換者たちなのである。かかる具体的な実際の交換関係を問題にしながら、なおかつ、 x 量の商品Aは「 y 量の商品Bを自分との等価物、いかえれば等しい価値を持つ物とみなしている」のだ、などと主張することのいかに背理たるか、多言を要すまい。

では、具体的な実際の交換関係としての「 x 量の商品A = y 量の商品B」という等式は何を意味するのか？ 無論、商品Aの所持者が「 y 量の商品Bを持ってくれば x 量の商品Aを渡すとしているものである」(三宅[1], 167ページ)。言い換えれば、商品Aの所持者が自分の商品の x 量は y 量の商品Bと交換されるだけの値打があるとしているものにはかならない。つまり y 量の商品Bは x 量の商品Aの交換価値[=「交換のための諸物の有用性」(K. I. S. 103)]を表わしているのである。

かくてマルクスの言う「生産物交換者たちがまず第一に実際に関心をもつ」「自分の生産物とひきかえにどれだけの他人の生産物が得られるか……という問題」とは、諸商品の交換価値とそれらの大きさの問題にはかならない。実際、商品生産者たちにとっては自分たちの生産物は「直接にはただ、交換価値の担い手でありしたがって交換手段である」(ebenda, S. 100)にすぎないのであるから、彼らが自分たちの生産物の交換価値の大きさに「まず第一に実際に関心を持つ」のは、至極当然のことなのである。

このように、マルクス自身が述べているところからしても、商品所有者たちの「一つの意志行為を媒介としてのみ」成立する具体的な実際の売買価格（または諸商品の交換比率）は、諸商品の価値の大きさを表現するものではありえず、諸商品の交換価値の大きさを表現するものでしかありえない。しかも、そうして具体的な実際の売買価格が諸商品の交換価値の大きさを

表現するものでしかありえないのであってみれば、その際の貨幣の機能が価値の尺度たる機能でありえないことも議論の余地がない。この場合には、諸商品の交換価値の大きさが貨幣のそれを尺度として評価され²⁵⁾、応分の貨幣量で表

25) 今も言うように、ある商品の交換価値とは、要するにその商品の「交換のための有用性」の謂にほかならず、その商品と引き換えられるべき（または引き換えられる）他の商品の量において自らの量的規定性をもつにすぎない。これに対して、ある商品の価値とはその生産に社会的に必要な労働時間（労働量）の商品経済的な形態規定にはかならないのであるから、その量的規定性はその生産に社会的に必要な労働時間（労働量）においてすでに客観的に与えられているのである。だから等しく「表現」と言っても、価値の場合と交換価値の場合とでは自ずから意味内容を異にする。その違いを端的に言えば、価値の大きさは表現される前にすでに規定されており、したがってその大きさを知っていないことには表現しようがないのに対して、交換価値の大きさは評価され表現されることによって初めて規定されるのであり、 x 量の商品Aは商品Bの y 量と交換されるだけの値打があると評価することは同時に x 量の商品Aの交換価値は商品Bの y 量であると表現することでもある、ということである。したがってまた、等しく「尺度」と言っても、「価値の尺度」と「交換価値の尺度」では自ずから機能の仕方が異なる。けれども、その点をとらえて三宅教授が次のように言われるのは納得がいかない。

「(松田にあっては)『尺度』が尺度として機能するというのは相手の大きさを、尺度する物の大きさをキチンと計量することであり、『表現』するのはそれをどれだけであったと表現するのだから、とされていたのであるから、『交換価値』表現にたいするこのような氏の説明は、氏のこれまでの主張の論理からすれば、まったく説明になっていないことになる。こうして氏は、これまで自説を構築してきたみずからの論理のみずからを否定する結果になっておられるのであって、したがって氏の説明は自己崩壊することになってしまっている。」(三宅[1], 173—174ページ)

先にも指摘したところであるが、どういふわけか教授はまるで私が専ら語義論をこととしておられるかのように曲解されるのであって、ここでもそうした曲解に立脚されて、乱暴にも「価値の尺度」の「尺度」と「交換価値の尺度」の「尺度」との意味の違いを以て直ちに拙論の「自己崩壊」を宣

現されているわけであるから、貨幣はまさに交換価値の尺度として機能しているのである。然るに、すでに見たように「(『商品の価値は社会的なものであるから』) 他の商品との交換関係で自らを表示するほかない。」という命題を

告されるのである。もちろん私の説明が説明になっているかどうかは私自身の決めうることではありえないが、三宅教授も引用されているように、私の説明は次のようなものであった。

「価値と違って交換価値の大きさは所与のものではない。『商品』は、その価値が商品の現物形態とは違った独特な現象形態、すなわち交換価値という現象形態をたもつとき、そのあるがままのこのような「商品は使用価値であるとともに交換価値である」という二重物として現われる」(K. I, S. 75. []内引用者)のであり、したがって『交換価値は、まず第一に、ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現われる』(ebenda, S. 50)ほかならないのである。だからそれは計量されることを得ず、ただ評価されるだけなのである。」(拙稿[1], 59ページ。なお、この文章は注記である。)

この文章で私は、価値の大きさは所与のものであるから(それを表現するためには)計量される(のでなければならない)のに対して、交換価値の大きさは所与のものではなく、生産物交換者たちの評価に従って「ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現われる」ものであるから、「だからそれは計量されることを得ず、ただ評価されるだけなのである」、ということ述べているつもりであるが、もしも私の言うように具体的な実際の売買過程においては生産物交換者たちが諸商品の交換価値の大きさを評価してそれを貨幣の量で表現するのだとすれば、その際には貨幣の交換価値が諸商品の交換価値の評価の基準とされているのだということは明らかであろう。そこで私はこの「交換価値の評価の基準」を、「価値の尺度」に対応させて「交換価値の尺度」と呼んだのである。「評価の基準」は「尺度」という言葉に含まれている至極普通の意味にすぎないのであるから、「交換価値の評価の基準」を「交換価値の尺度」と呼んだところでそれ自体としてはどうということもないのであるが、それでも三宅教授が、松田の「価値尺度」論では、「価値の尺度」と「交換価値の尺度」とでは「尺度」の意味内容が違うのだから、同じ「尺度」という言葉を用いるわけにはいかないはずだ、と言われるのであれ

「この交換関係においてその価値の大きさが表わされているのである。」という命題にあっさり言い換えられてしまう三宅教授は、具体的な実際の売買価格においても価値の大きさが表現されているのだと思ひ込んでしまわれる。かくて、実際には価値の大きさなど表現されていない価格を表象として思い浮かべておられながら、なおかつその種の価格において価値の大きさが表現されていることを示そうとされるわけであるから、マルクスが述べていることをことごとく正反対の意味に解する「無理な、珍奇な解釈」に三宅教授が陥ってしまわれたのも、けだし当然の成行きだったのである。

次に(2)のように考えてみることにしよう。そうすると問題は、「価値」論・「価値形態」論においてマルクスは何を明らかにしようとしているのか、ということに尽きるであろう。そこでまず、『資本論』の課題と方法についてマルクスがどう考えていたか、ということを確認する作業から始めよう。

周知のとおり、彼は自ら次のように述べている。

「生産関係の物化の叙述や生産当事者たちにたいする生産関係の独立化の叙述では、われわれは、もろもろの関連が世界市場、その景気変動、市場価格の運動、信用の期間、産業や商業の循環、繁栄と恐慌との交替をつうじて生産当事者たちにたいして、圧倒的な、彼らを無意志的に支配する自然法則として現われ、彼らに対立して盲目的な必然性として力をふるう仕方には立ち入らない。なぜ立ち入らないかと言えば、競争の現実の運動はわれわれの計画の範囲外にあるものであって、われわれはただ資本主義的生産様式の内的編

成を、いわばその理想的平均において、示しさえすればよい²⁶⁾ のだからである。」(K. III. S. 839.)

ここでは、とりあえず次の諸点に留意しておくことにしたい。(1)「競争の現実の運動」と「内的編成」が区別されていること。(2)「競争の現実の運動」は「もろもろの関連が」「生産当事者たちにたいして、圧倒的な、彼らを無意志的に支配する自然法則として現われ、彼らに対立して盲目的な必然性として力をふるう仕方」に関連せしめられていること。(3)「内的編成」が「いわば」「理想的平均」だとされていること²⁷⁾。こうした観点は、もちろんマルクスの次のような資本主義観に照応している。

「ブルジョア社会の核心は、まさに、アブリオリに〔その本性上〕生産の意識的な社会的な規制が行われぬ、ということにある。理性的なものや自然必然的なものは、ただ、盲目的に作用する平均として実現されるだけである。」²⁸⁾

「そこでは原則がただ無原則性の盲目的に作用する平均法則として貫かれうるような生産様式」(K. I, S. 117)。

つまりマルクスは、「原則」(=「理性的なものや自然的なもの」)は「競争の現実の運動」を通じて「理想的平均」としてのみ貫かれうる、

26) ここは原文では 'wir nur die innere Organisation der kapitalistischen Produktionsweise, sozusagen in ihrem idealen Durchschnitt, darzustellen haben.' となっており, 'ihr' は文法上は 'die Organisation' と 'die Produktionsweise' のどちらを指していてもよいわけであるが, 文意からすれば後者を指していると解するのが妥当であろう。

27) マルクスの「理想的平均」概念については, 高須賀義博『マルクスの競争・恐慌観』(岩波書店, 1985年)を参照されたい。

28) マルクス=エンゲルス(岡崎次郎訳)『資本論書簡(2)』大月書店, 1971年, 163ページ。ただし, 文体は変えてある。

ば、(実際にはそうではないが、とりあえず百歩譲って)「交換価値の尺度」を「交換価値の評価基準」と言い直してもよい。それだけならば要するに言葉の適否の問題にすぎないのであって、拙論の「自己崩壊」につながるようなそんな大層な問題では全然ありえないはずである。

と理解しているものであり、したがって、「理想的平均」をば「原則」(=「理性的なものや自然必然的なもの」)が貫かれた(または実現された)姿として把握しているわけである。してみると、「内的編成」は「原則」(=「理性的なものや自然必然的なもの」)にかかわる概念であるということになるように思われるが、その点を確認するためには、マルクスの言う「原則」(=「理性的なものや自然必然的なもの」)とは何であるのか、ということをもまず確かめておかなければならない。彼は次のように述べている。

「どの国民も、もし1年とは言わず数週間でも労働をやめれば、死んでしまうであろう、ということは子供でもわかることです。また、いろいろな欲望量に対応する諸生産物の量が社会的総労働のいろいろな量的に規定された量を必要とするということも、やはり子供でもわかることです。このような、一定の割合での社会的労働の分割の必要は、けっして社会的生産の特定の形態によって廃棄されうるものではなくて、ただその現象様式を変えうるだけだ、ということも自明です。自然法則はけっして廃棄されうるものではありません。歴史的に違ういろいろな状態のもとで変化しうるものものは、ただ、かの諸法則が貫かれる形態だけです。そして、社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される社会状態のもとでこのような一定の割合での労働の分割が実現される形態、これがまさにこれらの生産物の交換価値なのです。」²⁹⁾

見られるとおりのマルクスは、「いろいろな欲望量に対応する諸生産物の量が社会的総労働のいろいろな量的に規定された量を必要とするということ」、したがってそれに対応して社会的総労働が一定の割合で分割されなければなら

いということ、社会的生産の特定の形態にかかわりのない——という意味で——「自然法則」と呼び、「社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される社会状態のもとで」その「自然法則」が直接に実現される形態、これがまさしくこれらの生産物の価値なのだ、と理解しているのである(上でマルクスが「原則」=「理性的なものや自然必然的なもの」と呼んでいるものがここに言う「自然法則」であることは言うまでもあるまい)。たしかに、「社会的労働の関連が個人的労働生産物の私的交換として実現される社会状態のもとで」は、「自然法則」は、直接には、個人的労働生産物が商品という形態を受け取り、その商品の生産に社会的に必要な労働時間(労働量)が価値という形態を受け取り、さらにその価値はまた貨幣の価値を尺度として計量され表現されることによって価格という形態を受け取るばかりでなく、「社会的労働の関連」が貨幣を媒介とする「価値どおりの交換」という形態を受け取る、というふうにして実現されるほかあるまい³⁰⁾。かくてマルクスは、「自然法則」の商品経済的(かつ直接的な)実現形態を規定する諸範疇の関連を、追究し措定する。だが、そうして「価値論・価値形態論・価値尺度論」において解明され把握された諸範疇の関連は、とりもなおさず単純商品流通の「内的編成」を示すものにはかならない。逆に言えば、「内的編成」とは「自然法則」の直接的な実現形態を示すものにはかならないのである³¹⁾。

30) 「いろいろな人間労働の同等性はいろいろな労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間労働力の支出の尺度は労働生産物の価値量という形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働の前述の社会的規定がそのなかで実証されるところの彼らの諸関係は、いろいろな労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。」(K. I, S. 86.)

31) ここで「直接」と言うのは、もちろん「競争の現実の運動」を媒介とすることなしに”という意味においてである。前述のようにマルクスは、「原則」(=「自然法則」)は「競争の現実の運動」を通じて「理想的平均」としてのみ実現される、

29) 同前、162—163ページ。傍点—マルクス。

こうして『資本論』第1巻第1篇が単純商品流通の「内的編成」を明らかにしようとしているものだとすれば、そこにおいて「価値どおりの交換」が前提され、「すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自な一商品で共同に計ることができる」とされているのは、少しも異とするに足りない。けれども、そのことは同時に、『資本論』第1巻第1篇でマルクスが定立している諸命題を不用意に現実の具体的な諸関係に適用してはならない、ということをも意味していることに注意しなければならない。マルクスはこう言っているのである。すなわち、「労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の現象的な運動の下に隠れている秘密なのである。」(K. I, S. 89) と。「秘密」は隠れているからこそ「秘密」なのであり、その点はマルクスが「内的」という場合も同様である。彼は「内的編成」をしばしば「内的(諸)関係」とか「内的(諸)法則」とかと呼んでいるけれども、この場合に「内的」と言うのは、それがそのままの姿では外に現われないからにはかならない。「原則」は「競争の現実の運動」を通じて「理想的平均」としてのみ貫かれ(実現され)うるものであり、「競争では、したがってまた競争当事者たちの意識のなかでは、すべてのことがさかさまになって現われる」(K. III S. 235) のである³²⁾。

と理解しているわけであるが、彼の理解ではまた、「競争は資本の内的諸法則を執行する。競争はこれを個々の資本に對置して強制法則たらしめるが、しかしそれを発見する[erfinden-schaffen-創出する]のではない。競争はそれを実現するのである。」[Karl Marx, Grundrisse der politischen Ökonomie, Dietz Verlag Berlin, 1953, S. 638. カール・マルクス(高木幸二郎監訳)『経済学批判要綱』第4分冊, 大月書店, 1962年, 704ページ。〔〕内 - 引用者。] それゆえマルクスは「競争の現実の運動」によって執行され実現されるべき「内的諸法則」をまず論定しようとしているのであって、その「内的諸法則」こそが「内的編成」をなすものにかならないのである。

32) 以上の論点については拙稿[3]でもう少し詳しく

かくして今、「現象的な運動の下に隠れている秘密」(=「内的編成」=「内的(諸)関係」=「内的(諸)法則」)ないしはこれを理論的に解き明かす場を「「秘密」の世界」と呼び、「競争の現実の運動」ないしはこれを理論的に分析する場を「「競争」の世界」と呼ぶことにすれば、これら二つの世界(とそれらに対応する二つの論理)を峻別しなければならない、ということにはもはや明らかであろう。「秘密」の世界は「「競争」の世界」を現出せしめる源であり、「「競争」の世界」はその「理想的平均」において「「秘密」の世界」を実現しなければならない。また、「秘密」の世界には競争当事者たちの意識が介入する余地はなく、「「競争」の世界」は競争当事者たちの「意志行為」を欠いては成り立たない。かくて、価値および価値を表現する「価値どおりの価格」は専ら「「秘密」の世界」の範疇であり、「「競争」の世界」では、それらは競争当事者たちの意識に媒介されて、交換価値および交換価値を表現する価格としてのみ現われる。とはいえ、もちろん交換価値は何ら商品に内在する性質ではなく、競争当事者たちの意識に媒介された価値の現象形態にすぎない。それゆえ、交換価値の大きさは結局は価値の大きさに帰着しようとするのをえないのであって、ここにおいて「「競争」の世界」の価格は絶えざる変動を繰り返すことにならざるをえない。それゆえまた、そうした価格変動の「理想的平均」において、「商品の価格は貨幣で表現されたその価値ほかならないという法則」³³⁾が、貫かれ(実現され)ることにもなるわけである³⁴⁾。してみれば、「法則レベルの価格(法則を論じる際にマルクスが常に仮定し

く論じてあるので、併せて参照されたい。

33) カール・マルクス(岡崎次郎訳)『直接的生産過程の諸結果』大月書店, 1971年, 161ページ。

34) 「競争は、一生産物の相対価値はその生産物の生産に必要な労働時間によって決定されるという法則を、実現させる。」[カール・マルクス『哲学の貧困』(『マルクス=エンゲルス全集』第4巻所収), 93ページ。]

ている『価値どおりの交換または販売』に対応するところの“価値どおりの価格”と現象レベルの価格（価値と価格の乖離を問題にする際に常に意識されている具体的な実際の売買価格と）（拙稿[2]，76ページ）を区別すると

35) この点についても、詳しくは拙稿[3]を参照されたい。

36) マルクスは、リカードの方法論的な曖昧さを批判して、次のように述べている。

「リカードは、法則をそのものとして把握するために、意識的に競争の形態を、競争の外観を捨象している。かれが非難されるべきことは、一方では、かれの抽象がまだ十分であるにはほど遠く、完全に十分ではないということである。したがって、たとえば、かれは商品の価値を理解する場合に、すでに早くもあらゆる種類の具体的な諸関係への考慮によって決定的な影響をうけることになっている。他方では、かれが非難されるべきことは、かれが現象形態を、直接に、ただちに、一般

と——さらには“「秘密」の世界”と“「競争」の世界”との区別と連関³⁵⁾をしっかりと把握すること——は、やはりマルクス「価値尺度」論の理解のために必要不可欠であると言わなければなるまい³⁶⁾。

的な諸法則の証明または説明と解して、それをけっして展開していないということである。」(Theorien II, S. 100. 傍点 — マルクス。)

ここでマルクスが「それをけっして展開していない」と言っているのは直接には生産価格のことであるが、“「価値を理解する場合に、すでに早くもあらゆる種類の具体的な考慮によって決定的な影響をうけ」、「現象形態を、直接に、ただちに、一般的な法則の証明または説明と解して」しまう”という指摘は、われわれの目下の問題についても大いに示唆するところがある。

(1987年7月13日受理)